

グラントワ応援団通信

平成30年

1月21日発行

第49号

ようこそ、グラントワへ

〜沖縄からの劇場研修生を受け入れて〜

いわみ芸術劇場 文化事業課長

山崎 晋志

昨年の11月下旬、沖縄県南城市のシユガーホールからグラントワに若い男性が2ヶ月間の研修に来られました。名前は小川恵祐さんです。私たち劇場職員の仕事のうち「アートマネジメント」という分野を大学院で専門に学び、今年度の4月からシユガーホールで働き始めた社会人1年生です。

日本では「アートマネジメント」は学問として新しい分野で、専門に教えてくれる大学もまだまだ少ないのが現状です。私たちグラントワの劇場職員もグラントワに入り、仕事として実践の場で経験を積んで学んできました。研修希望の打診があったとき、私からみれば超エリートに何を研修してもらえれば良いだろう、反対に教わることになるのでは？などと戦々恐々でした。

せっかくですので、小川さんの研修奮闘記をご紹介します。

まず気になるのは、なぜ彼は研修先にグラントワを選んだのか？ということです。その答えは、実に納得いくものでした。

（小川）「僕は、ガムランなど世界の伝統音楽に興味があって研究していました。だから石見音楽にとっても興味があるんです」。まずは、地域に根ざしている石見音楽と、劇場の音楽事業や社中さんと劇場の関わりに興味があったようです。やはり、この地域で石見音楽の存在は大きいですね。そして、昨年までシユガーホールの芸術監督だった中村透さんから、特徴的なグラントワの音楽事業や地域に密着した4つのフランチャイズ団体の運営、活発なボランティア組織などグラントワで学ぶことに

賛成し勧めていただいたそうです。

小川さんが11月22日に来られて以降、劇団四季公演からスタートし、歳末神楽や各種アウトリーチの見学、益田の誇る太鼓打ち今福さんの「新春太鼓祈願」、クラナリエなど季節行事、益田系操り人形出前公演や稽古への参加、グラントワシアター、いっどこ音楽祭、グラントワならではの創作舞台「ミュージシア」、各フランチャイズ団体の練習など様々なグラントワ事業を体験していただきました。

研修の終盤で開催された「グラントワ・カンタート」では、小川さんも運営側の一員として大活躍。参加者やお客様に配る見事な歌詩集を作ってくださいました。中高生の公募合唱団「ネクストクワイア」では合宿練習にも参加してもらい、年齢の近い子どもたちに慕われ、本番の舞台と一緒に歌っていました。また、400人近くが参加する「交流会」では、この盛大な会を取り仕切るボランティア会の事前会議から参加してもらい、当日のおもてなしの準備・段取りの良さや工夫された地元料理の数々、テーブル配置から運営にいたるまでを目の当たりにして、大いに感激されていました。

「本当の地域密着とは、グラントワの

ようなことを言うのですね。地域の方々、地域のアーティストとの連携も素晴らしいですし、本当にすごいことだと思いました。沖縄に帰ってこういう取り組みができればと思います。グラントワのようにはなかなか難しいですよ。最後の研修事業「今福優新春太鼓祈願」が終わってからの小川さんの感想です。小川さんの言葉や事業を体験されたときの感動されている様子から「グラントワは地域に支えられ、そのことが全国にも誇れる取り組みとなっている」と、私もあらためて認識させてもらいました。小川さん、2ヶ月間お疲れ様でした。

みなさん、沖縄に行かれた際は、ぜひ南城市のシユガーホールに足を運んであげてください。サトウキビ畑の中に建つ、魅力的なホールだそうです。



(写真)

上、シユガーホール・下右、小川さん、下左、事業課ミーティング

NHK交響楽団 益田公演

指揮 … ステファン・ブルニエ
ピアノ … 上原彩子

3月12日(月)午後6時30分開演

情報発信ボランティア 大庭 明 博

グラントワに4度目の来演となるNHK交響楽団。NHK松江放送局の主催となる今回の公演は、倉敷・呉・山口に続く4日連続公演の最終日に当たります。ピアノの上原彩子さんは平成20年・22年に読売日本交響楽団・NHK交響楽団とグラントワで共演されており3度目の来演で、世界最高峰のチャイコフスキー国際音楽コンクール・ピアノ部門の覇者として国内外で活躍中です。

演奏曲目は次の名作2作品です。

○ ラフマニノフ

ピアノ協奏曲第3番ニ短調

ロシア出身の作曲家であり大ピアニストであったラフマニノフは、生涯に4曲のピアノ協奏曲を残しています。その中でも第3番は第2番と並んで演奏機会の多い人気曲です。ピアノが簡素な主題を弾き始め、だんだんとドラマチックでスケールも大きくなる第1楽章。第2楽章ではオーボエが物悲しい旋律を歌い弦楽器がしつとりと応えます。次第に熱

を帯び、切れ目なく続く第3楽章はダイナミズム溢れる独奏ピアノで開始・展開されていき、興奮に満ちた壮麗な音楽で締め括られます。メランコリックな情感を持ち、極めて高度な技巧を要求する20世紀初頭のピアノと管弦楽のための大作を、上原彩子さんの音楽性豊かな圧巻の演奏で楽しめることと思えます。

○ ドヴォルザーク

交響曲第8番ト長調

チェコ生まれの作曲家ドヴォルザークの交響曲第8番は、彼の全交響曲中最も民族色豊かな作品で、第7番・第9番「新世界より」と同様の人気曲となっています。作曲家自身、新世界交響曲作曲後もこの第8番をより高く評価していたそうです。チェコの自然を彷彿とさせるような明るく親しみやすいメロディーや舞曲風のリズムが散りばめられた色彩感あふれる「メロデー・メーカー」ドヴォルザークの名曲です。第1楽章はチェロとクラリネット、ホルンによって穏やかに悲しげな旋律でうたいだされたあと、第2楽章は弦の柔らかな旋律に、小鳥の鳴き声のようにフルートとオーボエが絡みつき、のどかな田園のようです。出だしのハットとするような弦ではじまるノスタル

ジックなメロディーがとても美しい第3楽章は、この交響曲で最も印象的で心魅かれる、明るく伸びやかな夢・希望に満ちたものとなっています。第4楽章はトランペットの高らかなファンファーレから始まり、チェロがテーマを出した後変奏されていき、最後は華やかに力強く曲を終わります。



管弦楽/NHK交響楽団



©Veerle Vercauteren



(右写真上) 指揮 … ステファン・ブルニエ
(同 下) ピアノ … 上原彩子

あ
と
が
き



平成30年、昭和で数えると93年になります。今年もよろしくお願ひいたします。昨年12月から 寒さの厳しい冬を迎えています。1月11日と12日には益田地方(平地)では珍しく大雪となりかなりの積雪となりました。私の記憶では4年ぶりのことと思います。交通にはかなりの支障がありました。

「グラントワ」のまわりの様子をカメラにおさめました。

皆さんの愛する「大蛇(おろち)像」は 見事に雪化粧していました。まわりの積雪は5センチはあったようです。また一面の雪に反射している石見瓦の美しい色合い(表現できません)は見事でした。(哲)